

ゲツテインゲン書評

(ガルヴェ／フェーダーによるカント『純粹理性批判』の書評)

城戸 淳 訳

Die Göttinger Rezension
(Garve/Feder)

Riga. Critik der reinen Vernunft.

Von Imman. Kant. 1781. 856 S. Oktav.

in: *Zugabe zu den Göttingischen Anzeigen von gelehrten Sachen* unter der Aufsicht der Königl. Gesellschaft der Wissenschaften. Der erste Band. auf das Jahr 1782, Göttingen, 3. Stück, den 19. Januar 1782, S. 40–48.

übersetzt von
KIDO Atsushi

ゲッティンゲン書評

(ガルヴェ／フェーダーによるカント『純粹理性批判』の書評)

【40】リガ、『純粹理性批判』、イマヌエル・カント著、一七八一年、八五六頁、八つ折り版。

この著作は読者の悟性をたえず訓練しつづけ——いつでも教育的であるわけではないが——、しばしば読者の注意力を酷使して疲労にまで到らせるものだが、ときには妙を得た例示が助け船を出し、またひろく一般に有用な推論が現われて思いがけず労が報われることもある。この著作は、より高い観念論の、あるいは著者のいいかたでは超越論的 (transcendental) 観念論の体系である。この観念論は、精神と物質とをひとしなみに包括し、世界とわれわれ自身とを表象へと変えるものであって、現象にもとづいてあらゆる客体を成立せしめるのだが、それは悟性が現象をひとつの経験系列へと連結し、さらに理性がそれをひとつの全体的で完全な世界体系へと拡大し、かつ統一しようと試みる——この試みは失敗に終わるとはいえ必然的なものである——ことによるのである。

著者の体系はおよそ以下の主要命題にもとづいている。すべてのわれわれの認識は、われわれ自身のある種の変様——これをわれわれは感覚と呼ぶ——から発生する。この変様がどこに存するのか、そしてどこから起因するかということは、結局われわれにはまったく知られざるところである。現実的な物が存在していて、そこに諸表象が内属するとして、あるいはわれわれから独立している現実的な諸々の物が存在していて、それらが諸表象をうみだしているとして、ところがそのさい、われわれはいずれの物についてもその述語をまったく知ることができない

のである。それにもかかわらずわれわれは客体（「の存在」）を想定する。われわれ自身を、そして諸物体を現実的な物として語り、それらを見知っていると信じ、それらについて判断する。

このようなことになる原因は、多くの現象がたがいに共通する或るものを有する、という点に存する。これによって、諸現象は相互のあいだで統合され、またわれわれ自身と呼ばれる或るものから区別されるのである。このようにしてわれわれは外的感官の諸直観を、【41】われわれの外にある物や出来事であるとみなす。なぜならそれらはすべて、あるひとつの空間のなかでたがいに並んで、またあるひとつの時間のなかでたがいに続きながら生じるものだからである。われわれが（いつかあるときにあるもの）かつ（どこかあるところにあるもの）として表象するものは、われわれにとって現実的である。空間と時間そのものはわれわれの外にある現実的なものではなく、また関係でもなく、また抽象された概念でもなく、われわれの表象能力の主観的法則であり、感覚の形式であり、感性的直観の主観的条件である。

以上のような、感覚はわれわれ自身の変様にすぎないという把握（主としてこの点にもとづいてバークリーもまたその観念論を作り上げたのである）、そして空間と時間に関する把握のうえに、カントの体系の基柱は据えられている。――

感性的現象がその他の現象から区別されるのはただ、感性的現象には空間と時間が結びついていてという主観的な条件によるのだが、この感性的現象から悟性は客体を作る。悟性は客体を作るのである。というのは悟性こそが第一に、魂のいくつかの継起する小さな変化を、完全な感覚の全体へと統一するものだからである。そして、その諸々の感覚全体をこんどは、それらが原因と結果として相継いで続いていくように時間のなかで結合するのも、悟性である。これによって、それぞれが無限の時間のなかで定まった場所を占めて、こうしてすべてが合わさって現

実的な物のもつような安定性と強度とを獲得するのである。そして最後に悟性は、連結という新たな追加要素によって、同時に存在する諸対象——それらは相方向的に影響を及ぼしあっている——を、継起的な諸対象——それらはただ一方向的にそれぞれ依存している——から区別するのであり、こうして感性的直観のなかに継起の秩序と規則ただしさ、相互的影響をもちこむことによつて、本来の意味における自然を創り、自然の法則を悟性の法則に即して決定するのである。このような悟性の法則が現象へと適用されるのだから、悟性の法則は現象よりも古いものである。【42】それゆえアプリアリオリな悟性概念が存在する。

われわれは、悟性の仕事の全部をさらに詳しく解明しようとする著者の試みに関しては、考慮せずに進むことにしよう。それは悟性を四つの主要機能へと、そして主要機能に依存する四つの主要概念へと還元する。四つの主要概念とはすなわち質、量、関係、様相であつて、それぞれがさらに単純な概念をそのもとに含みもつており、空間と時間の表象と結合して経験認識のための諸原則を与えるということになっている。それらの原則は論理学と存在論の周知の原則であつて、それが著者の観念論的な諸制約にしたがつて表現されているにすぎない。ときには、どのようなにしてライブニッツがその单子論に到達したのかが示され、またその单子論に反対する意見が述べられるのだが、その意見の大部分は著者の超越論的観念論と無関係にも成り立つようなものである。

著者が悟性の仕事について述べたことのすべてから帰結する主要な結果は、そこで、以下のようになるはずである。純粹悟性の正しい使用は、悟性の概念を感性的現象に適用し、概念と現象との結合によつて経験を形成するという点に存するのであり、われわれがけつして経験しえないような客体の現存在と特性を概念にもとづいて推論するというのは、悟性の誤用であり成功する見込みのまったくない仕事である。

(著者によれば経験とは、たんなる想像や夢想とは異なつて、感性的な直観が悟性概念と結合したものである。)

しかしわれわれは告白するが、現実的なものと、想像されたもの、たんに可能なものとの区別といった人間悟性にとって一般にじつに容易な区別が、感覚そのものにおける現実的なものの徴表をひとつも使わずに、悟性概念のたんなる適用によって、いかにして十分に根拠づけられうるのか、われわれには納得しがたい。というのは、夢をみている人にも目覚めている人にも、たとえ幻影や空想であつてもそれが【43】空間と時間における外的な現象として、しかもそれぞれたがいにきわめて秩序ただしく結合されている状態で、現われてくることがありうるからである。ときには外見上は現実の事象よりも秩序ただしく現われることもある。――

さてここで悟性にくわえて、表象を加工するために、さらにひとつ新たな力が登場する。理性である。悟性が現象にかかわるように、理性は集められた悟性概念に関わる。悟性は、個々の現象をひとつの繋がりあう経験の系列へともたらず規則を備えもつものに対して、理性は、これらの経験系列をひとつの完全な世界全体へと統合することができるような最上の原理を求めるのである。悟性は感覚から客体の連鎖を作るが、その連鎖は時間と空間の諸部分のようにたがいに依存しあうのであつて、最後の要素はつねにさらに以前に要素あるいはより遠い要素へとさし戻されることになる。それに対して理性は、連鎖をその最初の要素あるいはもっとも遠い要素にいたるまで延長する。理性は物の始まりあるいは限界を求めるのである。

理性の第一の法則は、なにか制約されたものがあれば、制約者の系列が完全に与えられているか、もしくは系列はなにか無制約的なものにまで登りつめるのでなければならぬ、ということである。この法則にしたがつて、理性は二重のしかたで経験を越えていくことになる。第一に、われわれが経験する物の系列を理性は、系列の完結に到達せんがために、経験そのものが及ぶ範囲を超えてさらに遠くへと延長していこうとする。第二に理性は、それに似たようなものさえも経験したことがないような物へと、すなわち無制約的なもの、絶対に必然的なもの、

制限されざるものへと、われわれを導いていこうとする。しかしながら理性の原則は、現実の物やその性質を示すというところにもまで拡張されると、仮象あるいは矛盾に逢着する。というのも理性の原則は、【44】自然の探究においては終わりなく、探究を前進させつづけなければならぬという規則としてのみ、悟性の役に立つはずだからである。

このような一般的な判定を著者は、思弁的な心理学、宇宙論、心理学のすべての主要な研究課題に対して適用してゆく。著者が随所でどのようにこの判定を確定し、正当化することを試みているかについては、完全とはいかないがある程度は以下の論述で把握できるだろう。

心理学においては、たんに思想としての思想に帰される諸規定が思考する存在者の性質だとみなされるとき、誤謬推理 (Trugschlüsse) が成立する。「私は考へる」という命題は合理的に推論する心理学全体の唯一の源泉であるのであるが、それは〈私〉という存在者そのものに関する述語を含んでいない。それはたんに、思想のある種の規定を、すなわち意識による思想の連関を言い表わすものにすぎない。それゆえこの命題からは、〈私〉ということ表象されるべき存在者の実在的な性質についても推論されないのである。

〈私〉という概念は多くの命題の主語であり、なんらかの命題の述語になることはけつしてありえない、ということから、思考する存在者である〈私〉は実体である、ということが「誤って」推論される。しかしこの実体という言葉は、たんに外的直観における持続的なものだけを表示するように定められているのである。

私の思想においては離ればなれの諸部分が見あたらぬということから、魂の単純性が推論される。しかし、現実的であると、すなわち外的な直観の客体であるとみなされるべきものにおいては、単純性ということは成り立たない。なぜなら、そのようなものの条件とは、それが空間のなかにあり、ある空間を充たしている、ということだ

からである。

意識の同一性からは魂の人格性が推論される。しかしながら系列をなす諸実体が、ちょうど運動を伝達するのと同様に、たがいにその意識や思想を移転するということがありえないだろうか。(この反論を【45】ヒュームもまたもちいたのだが、すでにヒューム以前のとうの昔からあった反論である。)

最後に、われわれ自身の意識と外的な物の直観との区別から、外的な物の観念性への誤謬推理がなされる。しかしながら、外的な感覚が物体に関する絶対的な述語を教えないのと同様に、内的な感覚はわれわれ自身に関する絶対的な述語をわれわれに教えないのである。それゆえ普通の観念論、あるいは著者のいいかたでは経験的な観念論は打破されることになろうが、それは物体の実存在が証明されたからではなく、われわれみずからの実存在についての確信が物体の実存在についての確信に対して有していたはずの優位が消滅したからなのである。――

われわれが世界を客観的な実在性とみなし、完全な全体として掌握しようとするかぎり、宇宙論における矛盾は不可避的なものであるという。世界の過ぎ去った持続の無限性、世界の延長と可分性の無限性は、悟性にとって理解しがたく、侮辱的なものである。というのも悟性は、探している休止地点を見つけることができないからである。そしてまた理性は、どこかで立ち留まるための十分な根拠をどこにも見出さないのである。

著者がここで発見した統合協定、すなわち理性の真の法則は、もしわれわれが著者をただしく理解しているのなら、以下の点に存する。たしかに理性は、物の体系の完全性を実現することを意図して、原因のさらなる原因を、部分のさらなる部分を、終わりになく探究するよう悟性に対して指令する。しかしながら同時にまた理性は、悟性はそのつど経験によって見出すような原因や部分を、けっして最後や最初の部分・原因だと受けとってはならないと警告してもいる。それは近似 (Approximation) の法則であって、到達不可能性とたえまない接近とを同時に含み

もつのである。――

自然神学に対する批判の結果はこれまでのものとよく似ている。現実性を言い表わすように見える命題は、悟性に対してある種の手続きを指示するにすぎない規則へと変えられる。【46】ここで著者が付け加えた新しい論点は、思弁が二つの天秤皿の重さを等しくしたばあい、あるいはむしろ両方とも空のままにしておいたばあい、実践的な関心の助けを借りて、道徳的理念が決定権をもつようにしたことだけである。

思弁が明らかにすることは以下のことである。すなわち、制限された実在的なものについてのあらゆる思想は、制限された空間についての思想に似ている。無限な普遍的空間がなければ、制限された空間は可能ではないであろうように、普遍的で無限な実在的なもの――それが個別的な物の規定すなわち制限の根拠となるであろう――がなければ、規定された有限な実在的なものはないであろう。しかし空間に関しても実在的なものに関しても、それはただわれわれの概念にとつて真実であるにすぎない。すなわち、どの程度まである表象は別のある表象を前提するのかに関するわれわれの悟性の法則にすぎないのである。――

より多くのことを証明するはずのその他すべての証明は、著者のみるところでは、その証明に欠陥があったり、不十分であったりする。著者が最後に、普通の思考様式から思弁的概念を奪いとつたあとに、道徳的概念によつて普通の思考様式を根拠づけようとしている方法については、われわれはこれをまったく省略して先に進みたい。とこの論点はほとんど論評に耐えないと思われるからである。もちろん、真なるものの概念や思考のきわめて普遍的な法則を、正しい行動に関するきわめて普遍的な概念や原則に結びつける方法にはする。これはわれわれの自然本性に根拠をもち、思弁の逸脱に対して防御し、あるいは逸脱から連れ戻すことができる方法である。しかしながらわれわれはそれを、著者の言いかたや表現方法のなかには見出さないのである。〔改行〕

この著作の最後の部門は方法論を含む。ここでは、まず理性がなにに対して用心しなければならぬかが示されるが、これが訓練である。【47】第二には理性が従わなければならない規則が示され、これは純粹理性の規準である。方法論の内容についてこれ以上くわしく分析することはできないが、これまで述べてきたことから、すでにその大部分は推し量ることができるだろう。

この著書は全体としてはもちろん、思弁哲学のもつ厄介きわまる諸困難に精通するのに役立つし、またあまりにも高慢かつ大胆にみずからの想像された純粹理性を頼りにして形而上学的体系を構築する者や擁護する者に対して、治療効果のある考察のための多くの材料を提供しうるものである。しかしながら、度を超えて逸脱する懷疑論と独断論との中央路を、そしてまた、たとえまったく満足してではないにせよ安心してもっとも自然な思考様式へと連れもどすような正しい中道を、著者が選んだようにはわれわれには思われないのである。

しかしわれわれの考えでは、どちらの道も確かな標識で示されている。まず最初に、悟性の正しい使用は、正しい行動のもっとも普遍的な概念に、すなわちわれわれの道徳的自然本性の根本法則に、したがって幸福の増進に、適合していなければならない。ここからただちに明らかのように、悟性はその固有の根本法則にしたがって適用されなければならない。その根本法則によって矛盾は我慢できないものになり、また賛同には根拠が必要で、反対根拠のばあいには賛同の根拠に優越する持続的な根拠が必要となる。同じくここからつぎのこともまた帰結する。すなわちわれわれはもっとも強くて持続的な感覚、あるいはもっとも強くて持続的な仮象を、われわれの最終的な実在性として頼りにしなければならぬ、ということである。これが普通の人間理性のなすところである。

そして、いかにして合理的推論者はここから逸れていくのだろうか。それは、感覚の二つの種類、すなわち内的感覚と外的感覚とを並列的に置いて、【48】一緒にして融合あるいは変形しようとすることによってなのである。

そこからして、内的感覚の認識が外的感覚の形式へと変形され、あるいはそれと混同されると、唯物論や擬人観その他が生ずる。そしてまた、内的感覚にくわえて外的感覚が正当に成立し、その固有の特徴を有する、ということに異義が唱えられるとき、観念論が生ずる。懐疑論は、すべてを乱雑に混乱させて動揺させるために、あるときは一方をおこない、またあるときは他方をおこなう。

われわれの著者もまたある程度はそうである。実体と現実性の概念を、外的感覚にのみ属するとみなされるものとして理解しようとするとき、著者は内的感覚の正当性を見誤っている。しかし著者の観念論がいつそう抵抗して争っているのは、外的感覚の法則に対してであり、われわれの本性に即してそこから成立する表象様式と言葉遣いに対してである。もし著者自身が主張するように、悟性はただ感覚を加工するのみであり、新たな知識をわれわれにもたらさないとするならば、悟性がその第一法則に則して働いているといえるのは、現実性に関わるすべてのものにおいて、感覚を管理するよりは、むしろ感覚によって管理されている場合であろう。さらにもし、観念論者が主張しようとするもつとも過激なことを想定して、われわれがそれについてなにか知ったり言ったりできること的一切は、表象と思考法則にすぎないとするならば、そしてまたわれわれのうちなる表象がある種の法則にしたがって変様され秩序づけられたものこそが、まさにわれわれが客体や世界と呼んでいるものであるとするならば、いったいなんのために、この普通に受けいられている言葉遣いに対する争いがなされるのか。いったいなんのために、そしてどこから観念論的な区別がなされるのか。

【解題】

以上に訳出したのは、表題裏のページに記したように、一七八二年一月一九日付『ゲッティンゲン学報』に匿名で掲載された、カント『純粹理性批判』に対する書評である。

匿名ではあるが、周知のようにこれは、著名な通俗哲学者でライプツィヒ大学教授のクリスティアン・ガルヴェ（Christian Garve, 1742-98）が書いた批評文を、『学報』の編集者であったゲッティンゲン大学教授のヨハン・ゲオルク・フェーダー（Johann Georg Heinrich Feder, 1740-1821）が三分の一ほどに切り詰め、また文体や内容などに添削・改竄を加えて成り立ったものである。（なお、書評の成立の事情などについてはE・カッシーラー『カントの生涯と学説』（門脇・高橋・浜田監訳、みすず書房、二二二頁以下）にも描かれているし、書評者を名のり出る一七八三年三月一三日付ガルヴェのカント宛書簡に詳しい。）

この書評は、一七八一年の『純粹理性批判』上梓の後、カントが待ちに待った最初の書評であった。ところがようやく現われた書評は、冒頭から『批判』を観念論であると決めつけてバークリーになぞらえ、またいたるところ高慢な調子で大まかに *en gros* 判断して批判を投げかけるものであったので、カントの激昂をまねき、結果『プロレゴメナ』の執筆へと到る一因となった。その意味でこの書評は、カント哲学の形成史上、最重要のドキュメントである。

この書評の眼目はやはり「観念論」にある。書評者は、「感覚はわれわれ自身の変様にすぎない」という点に観念論の主要契機を認め、またカントの観念論を「より高い観念論の、あるいは著者のいいかたでは超越論的な（*transcendentell*）観念論の体系」であると評した。「より高い」というのは、バークリーが認めていた「精神」

の实在性をも否定して「世界とわれわれ自身とを表象へと変える」からであるが、このように一切を超越して包括する観念論が「超越論的観念論」であるとされたのである。カントの超越論的観念論の意図が誤解されたことは明らかである。それゆえカントは、『プロレゴメナ』の第一三節注解二、三で、感覚ではなく空間時間の観念性をあらためて主張し、また「付録」では直接、書評のこの箇所而言及して、「書評者にはまったく把握されなかった」「超越論的」という術語に注意を促したのである。しかしながら、観念論問題はこれで決着したのではなく、これ以降もカントの思考を触発しつづけ、第二版『純粹理性批判』における「観念論論駁」の改稿・追加へと繋がり、『オーパス・ポストウム』にいたるまでカント哲学の中心問題になった。

なお、この「ゲッティンゲン書評」に触れた本邦の研究としては、石川文康「論争家としてのカント——『観念論論駁』をめぐって」(『現代思想』一九九四年三月臨時増刊号「カント」)が、「恒常的仮象は真理なり」とするフェーダーの議論に対峙する論争家のすがたを描きだしている。また『カント全集 6 純粹理性批判 下・プロレゴメナ』(岩波書店、二〇〇六年)における、久呉高之の『プロレゴメナ』解説には、「ゲッティンゲン書評」と『プロレゴメナ』との関係について、とくに「超越論的 (transcendental)」と書評末尾の「観念論的な区別」に関して、詳細な分析が加えられており参考になった。

この邦訳の底本には、哲学文庫版『プロレゴメナ』Kant, *Prolegomena* [...], hrsg. von Konstantin Pollok, PhB 540, Felix Meiner Verlag, Hamburg 2001 に付録 Beilage として収録されているものを用いたが、ランダオ編のカント哲学書評集 *Rezensionen zur Kantischen Philosophie, Bd. I, 1781-87, hrsg. von Albert Landau, Albert Landau Verlag, Bebra 1991* も参照した。また、サッセン訳編による批評集 *Kant's Early Critics. The Empiricist Critique of the*

Theoretical Philosophy, übersetzt u. hrsg. von Brigitte Sassen, Cambridge University Press, 2000 に収められた英訳を参考にすることができた。

なお原文は、訳文中に注記した一箇所を除き改行なしで書かれているが、読みやすさを考慮して適宜改行した。訳文中の記号については、「」内の数字は『学報』のおよそのページ数であり、「」は訳者による補足などである。

(城戸 淳)